善と悪が重なるまで

えｃｓ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
善と悪が重なるまで

【Ｎコード】
Ｎ６９３２Ｂ

【作者名】
えｃｓ

【あらすじ】
お金持ちの息子の榛志久弘毅１６歳。ひょんな事からもう一つの人格が目覚めてしまう。だがその人格はかなり変わった人格だった。破壊と殺戮を求める人格。そして親に見捨てられて送り込まれた新しい学校。そこから繰り広げられるアクションノベルです。

一話

「ウィーン・・・ウィーン・・・・ウ・・・」
山奥の彼方にひっそりと建つ白い建物から警報のような音が流れてくる・・・・・・・・・・・・
だが、この音はこの１２０年間１度も流れることのなかった音だった。
そして、その建物の壁、というか壁に空いた大きな穴から１人の少年が出てきた。
「ハッ、だりぃ！」
「・・・・・もういやだぁ・・・・・・」
１人の少年が連続して言葉を発する。
そして、走る。走る。走る。穴から出て林を突っ切る。
やがて見えてきた滑走路。
後ろから追いかけてくる執行部の犬達。
その追っ手の見えない攻撃を片手で相殺しながら少年は１キロほど先の飛行機に向かって走る。
そして最期の追っ手を完全に沈黙させ飛行機の中に飛び乗る。
「行け。」
短く。ただそれだけを操縦士に伝える。
唸りを上げるプロペラ音。
地上から離れていく機体。
そしてその少年は暗い夜の闇に消えていった・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・

第一章　心の目覚め
「ああーー！これから何して帰ろうかなぁ？」

大崎市立高等学校の屋上に1人の少年が寝ころがって空を見ていた。この少年こそ、この物語の主人公の榛志久　弘毅　である。彼は大崎高校1年生16歳、親は大手化粧品メーカーの社長であり、弘毅はその1人息子であった。しかも、入学してから常に成績は2・3位をとっているだけあって、先生達には評判が特によかった。だが、弘毅は毎日こんな親の言う事ばかり聞いて生きて、いい大学に入って、会社を継ぐ、などという人生は弘毅にとって嫌気がさすような人生でしかなかった。

だから弘毅は色々考えたいときは、いつも風の当たる屋上でぼー、っとしているのである。

そんな弘毅が空を見ていると、

「お！やっぱここか、お前いつもここで空見てるよな？」

そんなときに、1人の色黒の少年がやってきた。

（ん？こいつ誰だったけなぁ？）

弘毅は昔から人と接することが苦手だった。だから、入学して半年以上は経つのに、クラスメートにまだ馴染めてないのである。

「え～～と、失礼だけど・・・誰？」

その色黒少年はやれやれというような顔をして、

「Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　菊崎　ハル」

と、なぜか英語で名前を名乗った。その傍らで弘毅は、せっかくの1人の時間を邪魔されたのが嫌だったのか、

（なんだこいつ？意味わかんねぇ・・・見ぬふり、見ぬふり・・・）

と、視線をまた広く広がる空に移す。

弘毅の横で1人で自己紹介してる色黒少年はその弘毅の様子に気ずいたのか、

「あ～！！おまえ、どうせ俺のこと変なやつと思ってるやろ！ふん！ええよもう！」

（あ～、うぜぇ・・・・、こういうハイテンションの奴嫌いなんだよなぁ・・・）

「俺になんか用なの？」

イライラした調子で弘毅は聞いた。すると、その関西少年は、話を聞いてくれるのが嬉しかったのか、にこにこして、
「あのさぁ、俺とダチにならへん？」
（んだよこいつ、わけわかんねぇ・・・・）
弘毅は学校ではあまり人と接するのが嫌いだったから、友達といえるものはいなかった。だから、正直嬉しかったのだが素直に喜べないのがこの男の欠点なのである。そうこう考えてる内にハルは、
「なぁ～ええやろ？」
と、聞いてきたので弘毅は、
「なんで俺なんかと友達になりたいの？」
弘毅ははじめからこれが疑問だったのである。すると、ハルは芝居のかかった悩んだ顔をすると、
「なんか、お前はみんなと違ってるところがおもろそうやから！」
ハルは自信満々の顔で答えた。
「あのなぁ～、人のこと勝手におもしろいとか決め付けんなよな・・・」
「ええやん。だってほんまにおもろそうやもん！」
（こいつの方がなんか人と違うんじゃねえか？）
色々な考えが頭の中で行き交う中、ウザったい気持ちと、友達が欲しい気持ちが対立していた。しかし弘毅は折角の申し出を断るのもなんだと思い、結局友達になる方に決めたのだった。
「別にいいよ。ダチになっても・・・」
「ホンマか！？おお～～！これからもよろしく！」
と、本当に嬉しそうにして今度は握手を求めてきた。弘毅はやれやれという感じで苦笑いをしながらも手を差し伸べて、ガッシリしたハルの手を握った。そして、ハルは、何かを思い出したような顔をして、
「そういえば、お前の名前聞いてへんかったな？教えてくれ。」
「俺は、榛志久　弘毅」
「ふ～ん、ってその名前どっかで聞いた事あんぞ？」

そうなのだ、弘毅は大崎市で1・2を争う資産家の1人息子なのだ。しかし、弘毅はそんなことをまったく言わない高校生だった。だから、みんなに色々言われてきたが、それも全て無視してきた。正直、弘毅は榛志久家に生まれてきたことを後悔していて、いっそのこと家出までしようか、と考えたほど自分の特別な部分が嫌いなのである。

「そんなことどうでもいいから、帰ろうよ。」

「あ、うん。そうやな。帰ろう帰ろう。」

そうして、やっとその話題から抜け出して帰ろうと思い、屋上のドアを開けて2人は階段に向かおうとしたところで、3人の不良が弘毅達の前に現れた。

「やっと見つけた〜ハルくんよぉ・・・・今からお返しの始まりだ！」

と、その中でも飛びぬけて体の大きい不良が、大声で怒鳴った。その不良の後ろから2人の鉄パイプを持ってハルを睨んでいた。どうやら、ハルがこの大きい不良と喧嘩で勝ってその仕返しをしに来たらしい。

「おい！なんかおまえしたのかよ！？」

「あ〜？俺何かしたかなぁ〜？」

と、本当に何も覚えてないらしい様子でハルは答えた。正直ムカついた。

「んなこと言ったって、あちらさんはお前の名前を呼んでんだぞ！？」

「でも、俺弱い奴に興味ないしなぁ〜？」

（なんかちょっとカッコいいかも・・・・）

なんて思ってしまうバカな弘毅であった。

そうこう考えている内にハルは、

「え〜と・・・どこのアホンダラじゃボケェ！！おのれらとしゃべってる暇なんかないんじゃボケ！」

と、さっきとは違う声色で怒鳴りはじめた。

「おのれらのせいで弘毅が怖がってるやないけぇ・・・・おのれら・・・・・」
ハルが何かを言おうとしたとき、いきなり後ろの鉄パイプを持っていた奴がハルを殴りに掛かった。突然の攻撃にハルはなすすべもなく殴られる。
「く、痛いなぁボケェ！！死にさらせ！」
と、叫ぶなりハルは体のでかい奴の顔を殴ろうとしたが、さっきの鉄パイプのもう片一方の奴がハルの顔面を殴った。ハルはもう一度殴りかかろうとしたが、結果はまた同じだった。
その後、ハルは2人に滅多打ちにされて、でかい奴が二人に「やめろ！」と怒鳴るまでやられっ放しだった。
そして2人の片一方が、
「こいつどうします？」
と、弘毅を指差して、でかい奴に聞いた。
「そいつもやれ。」
（ええ～！俺関係ねぇ～よ！マジで！？）
弘毅は、ほとんど泣き顔で、
「なんで俺もなんですか！？俺何もしてませんよぉ・・・・」
「口封じ。」
と、一言だけ言って階段を下りていった。
弘毅にはその一言が死刑宣告のように聞こえた。
「あ～行っちまったよ・・・」
「じゃ、早いとこ終わらせますか・・・」
そして、弘毅に近寄りいきなり顔面を蹴る。弘毅は鼻から出てきた血を見て、弘毅の心の中で何かが湧き上がってきた。怒りではない何かが弘毅の頭の中に入ってきた。
榛志久　弘毅は生まれてから一度も血を流した事がなかった。
そう一度も。
擦り傷も切り傷もまったくしたことがない。
というか怪我すらした事がない。

そんなドジを踏むような男ではなかった。
（お前さぁ・・喧嘩弱いな・・・・。こんな奴らに負けてるなんて・・・・情けねぇな・・・）
弘毅はその瞬間、深い海に落ちたような感覚に襲われた。
暗い、暗いまるで光が奪われたように暗い世界に弘毅の意識はいた。
そして、弘毅は暗闇から自分の姿を見ていた。
階段に横たわる自分の姿。２人の鉄パイプを持った男。
（これは・・・・・俺とさっきの２人？ってか、俺の体は？おい。どうなってんだ？）
そして、これから広がる映像が動き始めるのを弘毅はただ見ることしかできなかった。

「男のくせに得物使うってのは卑怯じゃねえか？」
「は？なんだコイツ？」
「ああ～気が狂ったんだな。きっと。」
２人は鉄パイプで弘毅の顔をダブルで横から狙ってきた。だが、弘毅はそれをなんなく避けたと思うと、前に踏み込み、２人の髪を掴んで振り回し始めた。そして、
「ブチ・・・・ゴン！！」
と、気味の悪い音がしたかと思うと、弘毅の前には髪の抜けた２人が頭から血を流していた。
そして、弘毅は笑っていた。
「いやぁ～暴れれてよかったぜ。だが、この体は居心地が悪いからもう変ってやるよ。」
と、高らかに叫ぶ。
（は？どういう意味なんだ？ってかお前誰だよ！）
弘毅は目の前の映像に向かって叫ぶ。
「心配すんな後で話してやるから。そんなことよりこいつを保健室に連れて行ってやれよ。」
そう言って、弘毅はハルを指差した。

（はぁ？？意味わかんねぇ！どうなってんだよ！これ！）
「だから心配すんなって言ってんだろ・・・・。今代わってやるから。クッ・・・」
（なんだ？クッ・・・・わぁぁぁぁぁぁ！！！！）
そのとき、またさっきと同じ感じ感覚に襲われた・・・・・・・
「ん？」
気がつくと、弘毅の意識はさっきの階段に戻ってきていた。そしてその階段の下の広場には鉄パイプの２人が白目になり横たわっていた。
「ウぅぅ・・・・・」
「あ！おい！大丈夫か？」
弘毅はハルが今にも死にそうな勢いで血を頭から吹いてるのを見て一瞬どうしたらいいのか躊躇したが、映像の中の弘毅の言っていた事を思い出し、言う通りにハルを保健室まで運んだのだった・・・・・・・
・・・・
・・・・・
・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・
「いやぁ〜〜俺死ぬかと思ったわ！ハハハハハ！！とにかく、マジでありがとう！！」
「いやもういいよ。それ何回も聞いたから・・・・」
（はぁ〜帰りてぇ・・・・）
あの後弘毅は保健室までハルを運び、職員室から養護の先生を呼んできたり、と大忙しだった。だが、養護の先生は「この子はいつも喧嘩してここに来るのよ。強いんだかなんだか知らないけどその後からまた違う子たちが来て、またここで喧嘩が始まるのに、今日はどうしたのかしら。」などと、のんきな事を言って頭に包帯を巻き終えた後、どこかに行ってしまった。そして、弘毅がうんざりした様子で窓から木を見ていると、そんな弘毅の様子に気がついたのか、
「よし帰ろか！もう6時半やからな。」

「ああ。早く帰ろう。」
そうして、保健の先生がいないうちにさっさと弘毅たちは保健室をあとにした・・・・・・・・・・・・

「なぁ？さっきから気になってたんだけど、あれからどうやって、あいつら倒したん？」
「え？え〜〜と・・・・・」
帰り道、そんなことを率直に聞かれて弘毅は内心困ってしまった。
（どうしよ〜〜こんなときは正直に言ったほうがいいのかなぁ〜？）
「その・・・、俺がやったんだあれ・・・」
「ハハハ！冗談は寝言で言わなあかんぞ！」
（やっぱり・・・・）
と弘毅は思った。なぜなら弘毅は喧嘩など嫌いだし、最近では血さえ見たことない学校ではとても大人しい1高校生だったから（自称）、そんなやつがあの2人を倒せるということなどあり得ないのだ。
「そうだよな〜！冗談だよ冗談。」
「そうそう。お前はそれでええんや！ガハッハハ！」
と、笑うと、
「んじゃ、あれ誰がやったん？」
と、真剣に聞いてきた。
（やべぇなぁ・・・・・なんて言い訳しようかなぁ・・・・・）
「あれはなんか3年生がいっぱい来て、そのあと・・・・・・・・・・・」
と、その後適当に捲し上げて20分後、途中、
「俺CD買いにいかなあかんねん！じゃな！また明日！」
「ああ。バイバイ〜」
と言って、帰っていってしまったハルを見送り、弘毅はやっとのことで家路に着いたのだった・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・

2話

第2章　心との対話

豪邸ともいえる屋敷の一室で弘毅は、今日あった色々な事を自分なりに整理していた。

（やっぱさぁ、あれは夢だったんだろうか。それとも本当に・・・・・）

色々な事が弘毅の頭を過ぎっていたとき、弘毅の自室のドアから「コンコン」というノックが聞こえ、返事を待たずにいきなり部屋に、1人の少女が　ドカドカ　となだれ込んできた。

この少女は弘毅と同じ大崎高等学校に通う幼馴染の　月烙　美代だった。美代の家は大崎市Ｎｏ．２の月烙コーポレーションの１人令嬢だった。弘毅とは幼稚園からの付き合いで、朝はいつも一緒に登校している仲だ。しかも美代は学校１の美少女で、ひっそり憧れを抱いている奴も少なくはなかった。

「今度はちゃんと『人の部屋入るときにはノックする』っていうことができましたね。でも返事待たずに入るなよ。」

と、弘毅は皮肉たっぷりに美代にいった。

「うるさいわねぇ～レディに対するデリカシィのない奴に言われたくない！」

「デリカシィってそもそも何？っていうかおまえ何しにきたの？」

（今日はただでさえ色々あったのに、こいつが来ると余計に気が滅入るよ・・・・・・）

「何よ？用なしに来ちゃいけないの！？」

「いけないね。だから何しに来たんだよ。」

「だって、家に居ても1人じゃつまんないもん！だからあんたの所に来たのよ。」

「何だよそれ・・・、俺はお前の暇つぶしなのか？つーか、出て行

け。」
「なによ～！せっかく来てやったのにその態度は。どうせあんたも暇なんでしょ？」
「誰も来てなんて頼んでねえし、暇なわけねーだろ。今日は色々あって疲れたんだよ。だから、か・え・れ。」
「嫌だ～～～！！」
まるで赤子のように駄々をこねる美代に弘毅はいつもの事なので無視をし始め、漫画を読もうとしたとき、いきなり漫画に伸ばした手を美代のミルクのように白く冷たい手が握った。
「な、なんだよ。何も話す事ねえよ。手離せよ。」
その握った手を見て弘毅はドキッとした。
「そんなこと言わないで話しようよ～～！」
と、しつこいセールスのように、なんとか弘毅と話そうと美代は懸命に説得しようとしていたときに、美代の携帯から奇妙なボイスが聞こえてきた。
「あ。お母さんだ～帰ってきたんなら美代も帰ろ～っと、弘毅。」
「ん？」
「今度こそは話せるように話題を考えておくこと！これ宿題だよ！」
「はぁ～！？わけわかんねよ！なんでお前と話さなきゃいけねぇんだ。」
と、弘毅が振り返るとそこには誰も居なかった。
「あいつ～！！マジむかつく。なんだよいきなり来て自分から喋ってたくせに俺になんの挨拶もなしに帰りやがって。」
弘毅は1人広い部屋で叫んだ。

美代が帰ってからも弘毅は物思いにふけっていた。
（あの出来事が嘘なら2人組みの奴らのこと・・・・・どう説明するんだ？・・・・・そういえば夢の中の奴が説明してやるとか言ってたけど・・・・・・どうなってんだよ・・・・・・）
そのとき、弘毅の頭の中に声が響く。

（なんか呼んだか？）
と、弘毅の疑問に答えが返ってきた。そして自分の頭の中は何かがいる、という確信を弘毅は持った。
「わぁ！！だ、誰だ！？」
（誰とはねーだろ誰とは。）
「もしかして今日の奴か！？」
（そうだろうな。多分）
そのときの弘毅の頭の中は色々な考えでゴチャゴチャであり、そして、この出来事を理解できるような状態ではなかった。
「おい！お前は何者だ！？」
（そんなに怒鳴ると外の皆さんに聞こえるぜ。もうちょっと大人しく質問してくれ、必ず答えてやっから。）
「あ。ああ・・・・・で、質問に答えろよ。」
（まず、俺が何もんなのかってことから説明しよう。俺は、榛志久弘毅　つまり、おまえ自身だよ。）
「は？」
弘毅はまったくわけが分からない、というような顔をしてしまった。そんな自分に気がつき、普通の顔に戻ると一気に喋りつくした。
「ちょ、待てよ。おまえが俺ってことはまずあり得ないことだ。だって現に俺は今ここにいて、さっきまで漫画を読んでたんだ。そんな俺がお前ってことはあり得ないんだよ。」
（これでもわかんねえのかマヌケが。俺様がマヌケのお前にも分かるように教えてやろう。俺はお前の危機的本能から生まれたもう１つのお前だ、分かりやすく言うと、お前はさっきの時点で多重人格者になっちまったんだよ。そして、お前が殴られたとき、お前の「助けて」っていう強い気持ちが俺を生み出したんだ。これにより俺はお前のもう１つの人格となって、お前は多重人格者となったんだ。これで分かったか？）
弘毅は分かりやすく言われていたが、信じられないことが多すぎて余計に頭の中が絡まってしまい、まだ事態が飲み込めていなかった。

それでも2分くらいすると弘毅にも分かるようになってきた。
「じゃ、お前はもう1人の俺なのか？」
（だから何度も言ってんだろ、そうだよ、俺はもう1人のお前だよ。分かったか？）
「あ・・・・ああ。なんとなく分かった。もう1つ聞きたい。お前はいつ出てくるんだ？」
（俺はいつでも出てこれるぜ。お前が望むのならば、お前が死にかけていても、授業中でも、どこにいても出てこれる。だが、お前にしかこの声は聞こえないし、俺はお前の頭の中にしか出て来れない。つまり、実体化はできないってこと。）
「人格だから実体化できないのは分かるよ。でも、今日の2人組みをやっつけたのは誰なんだ？」
（それは俺だ。あのときお前の体を借りて、お前の体の中に俺の人格が入った状態だったんだよ。）
「ということは、あのときの俺はお前だったのか。」
（そうだ。）
「大体分かってきたぞ。やっぱあれはマジだったのか・・・・・」
（そうだよ。いい加減認めろよ・・・・）
「じゃあ、俺はお前と喋っているときはみんなにはこの会話は独り言に聞こえるってことか・・・・」
（いいや。お前が心の中で言いたい事を言えば俺はそれに答えるし、お前も考えてるようにしとけば、みんなに変に思われないぜ。）
（へぇ～）
（そうだ。そうやるだけで俺と話せる。）
「ああ分かった。まだまだ聞きたい事は色々あるが、今日は眠すぎるからまた明日にするよ。」
（ああ。言い忘れてたが俺との対話は体力を使わないが、俺がお前の体に入るとお前の体にかなりの負担がかかるんだよ。）
「なんかそれスーパーマンみたいだな・・・・」
（お前の思い描いてるスーパーマンってどんなんだよ・・・・・）

「まぁどうでもいいや。ふぁぁ・・・・」

こうして弘毅は今から起こるとてつもない事などまったく知るよしもなく、安らかに眠りについたのであった・・

3話

第3章　新たなる出発点

一日が始まろうとしたとき、ある施設の一室で7人の人間が首を揃えていた。そして、その部屋の真ん中にいる女が7人に言う。

「今日集まってもらったのは新しい反応が入ったからです。名前は榛志久　弘毅　ＤＬ・・・９７％とのことです・・・」

その一言でその場の者たちの様子が一遍した。

「９７％だと！？マジか？？俺でも８９％だぞ！？最高のあいつでも９５％だぞ！そんなばかな・・・・・」

「ああ。それは本当の事なのか？」

「そうだそうだ！詳細を聞かないと納得できねぇよ！」

「確かに信じがたいですね・・・・」

色々な野次が飛び交う中、１人の女が、

「本当の事です。が、詳細はまだよくわかっていません・・・・・」

「なんだと！」

「ふざけんな！」

と、そのとき1人の少年が部屋に入ってきた。影で顔は見えない。

その少年が冷静で、尚且つ興奮も混じるような声で言った。

「みんなこれは本当のことだよ。」

その少年の一言で部屋の中の空気が変わった。いや、変わらされた、と言うべきだろう。

「この子はすごいよ。この子はどちら側かはまだ分からないけど。必ずこっち側に招きたい。奴らに改善される前にね。

」

「う、うん。」

「まぁ、そうするか・・・」

そこにいた者たちは口々にさっきと正反対のことを口にし始めた。

そして、その少年が口を開いた。

「では、この話題の事は今はまだ詳しく報告されていない。だがこの数値はあまりにも尋常ではなかったから皆に集ってもらったんだ。もうすぐ夜が明ける。詳しい事は分かり次第後々伝える。では解散していいよ。」
と、言い残して少年は最初に入って来たドアの中に消えいき、その後にそれぞれ7人が別の部屋に消えて行った・・・・・・・・・・・・・

そして話は弘毅側に戻る

ある朝、一組のカップル、いや、もとい1人の少年と1人の少女が大崎商店街の道を歩いていた。
「ねぇ～今度はあれ食べてみよ！きっと不味いだろうから。」
「は？不味いの食って何がうれしいんだか・・・。ってお前食いすぎだろ！さっきからそこら辺のもん買い漁って・・・」
「いいじゃん。成長期、成長期！弘毅は食べなさ過ぎなの！もっと食べなさい！はい、あ～ん。」
と、美代がたいやきを弘毅の口、ではなく頬にあてた。
「あちぃぃぃ！何すんだこのやろう！」
「昔のギャグだよ～。弘毅は引っかかりやすいね～！あはは」
「うるせえ！ったくもう！ブツブツ・・・・・」
「冗談、冗談。はいあ～ん。」
と、今度こそ食べたたいやきを弘毅は一口でほおばった。
（ん？うまい・・・）
「おいしいでしょ？私の好きな店なの。今度一緒に行こうよ。」
「やだよ。そんなめんどくさいの・・・・・・」
「またそういうこと言う～！あのねぇ・・・」
と、美代が言いかけたとき、弘毅の後ろの電柱からハルが姿を現した。

「よ～お二人さん熱いね～！弘毅おはよっす！」
「ああ。おはよう。」
そのときずっと黙っていた美代がいきなりハルを指差して、弘毅に
「誰？」と聞いてきた。弘毅がハルを紹介しようとする前にハルが
ズン　と弘毅の前に出てきて、べらべらと自己紹介を始めた。
「俺はハル。上の名前はいいからこっちで呼んでくれ！年は・・・・・
」
あまりにも長い自己紹介なので歩きながら話していると、美代がさ
すがにウザくなってきたのか、
「も、もうあたし先行くね。じゃ～ね弘毅。」
と、そそくさと走り去ってしまった。走り去ってからハルが、
「お前は羨ましすぎる！すぎてまうぞ！」
「は？意味わかんねえよ。何が羨ましいんだ？」
「あの人がお前と一緒におんのが羨ましい！ずばりそうです！そう
なんです！」
ハルは校門の前で奇怪な言葉を叫び、
「まぁ、いずれは俺が・・・・。おっと早くいかねえと遅刻だ遅刻。
」
そういって弘毅の腕を取って走りはじめた。
「そんなに急がなくても、まだまだ間に合うじゃん。」
「そんなこと言ってる場合ちゃう！後ろから昨日の奴等がついてき
とる！早く教室入るぞ！」
そう言われて後ろを振り返ると本当に昨日のあの２人が頭に包帯を
巻いたまま走って追いかけてきていた。
「こらぁぁ！まてぇ～！」
「アホンダラァ～！待て言われて待つ馬鹿がどこにおんねん！死ん
でまえ！」
とハルは廊下のゴミ箱を蹴飛ばし、２人組みはそれに引っかかって
こけてしまった。
そして教室にスライディングで入る二人。

それから弘毅たちが入ってすぐに教師も来たので2人組みは渋々帰って行った。
だがしかし、安全も束の間。弘毅は教室の中の感じがなにか違うのに気がついた。
その様子に逸早く気が付いた美代は、
「ねえねえ、一体何があったの？」
と、教室にいる他の生徒に聞き出す。元々人気者の美代である。答えを知るのは簡単だった。
「あ、美代ちゃん。おはよう。さっきの二人組みが狙ってるのはどうやら弘毅君らしいのよ。」
「え？弘毅を？なんでまた？」
「なんか昨日、弘毅君があの2人と喧嘩してボコボコにして髪の毛まで抜いちゃったらしいよ？」
「嘘・・・・弘毅がそんなことできるわけないよ！」
美代はほとんど裏声だった。
「でもさっきの二人みたでしょ？マジあれはやばかったよ？」
それから美代は弘毅に振り返って、
「本当なの弘毅？」
そのとき一部始終を聞いていたハルが、
「え？あいつらおまえがやったんか！？」
（やべぇ。どうしよ～？）
「いや！間違いじゃね！？俺が出来るわけないし！」
と、大声で言い返す弘毅。
「そうよね。弘毅はそんなことできないもんね。やっぱ違うんじゃない？」
「え～そんなはずないよ。三年の人たちが笑って言ってたもん。」
「あんた三年にどんなコネあんのよ・・・・・」
「そこは秘密ということで・・・って、見たのは本当なの！」
（喧嘩しそうだよどうしよ～、なぁどうしたらいいんだ！？）
（俺にいい考えがあるぜ？まず俺に体を変われ。）

（何する気？）
（どうでもいいから変われって！）
（う、・・・うん・・・・クッ・・・）
弘毅はまた目の前が一瞬真っ暗になったが、日頃の精神交換の練習で、前のように時間はかからなかった。
「あれは俺がやったんだよ！」
（は？）
「は？」
「はぁぁぁ？」
弘毅自身もわけ分からなくなるようになり、みんなもわけがわからないのであった。
「ほら！私の言った通りじゃん！やっぱり怖かった？」
美代と話していた女子生徒が弘毅に聞く。
「そんなわけないじゃん！見得張るのはやめなさいよ弘毅！」
「そや！嘘はあかんど嘘は！」
「マジだっつーの！ってか怖いわけないじゃん！ボコボコだよ！髪の毛も無いぜあいつら。どうやったかってのは・・・」
と、言いかけた所で教室の中にハゲの校長が入ってくる。
そして、校長の清水が、
「弘毅君、榛志久弘毅君。少し話があります。あとで校長室に来るように。それと、今日の授業は全校生徒休みです。」
校長の一言で湧き上がる歓声と一つのため息が教室にこだました。
一つのため息を吐いたのは弘毅である。
「わかりましたか？弘毅君？」
（ちゃんと答えろよ！）
（分かってるぜ。）
「はい！！！」
教室に響き渡る声で答えた。
（うるせえよばか！）
（いいじゃんいいじゃん）

「いい返事ですね」
そうして校長達はそそくさと教室から出て行った。
その後の弘毅は大変だった。なにせ校長直々の参上である。教室に来て、弘毅１人にだけ質問するなんて普通では考えられなかったからである。
「なんで？校長直々？」
「なんかしたのか？あいつ。」
「ああ。アレじゃね？昨日の喧嘩の件。」
「ば～か。だったら何で全校生徒休みなんだよ。」
「知らねぇ～」
（うわぁ～。マジ最悪・・・・・・）
色々な憶測が飛び交う中、弘毅は美代やハルに色々と聞かれる前にそそくさと教室を出たのであった。

広い校舎のうちの３０％が校長室という馬鹿でかいほどの部屋に校長専用のスポーツマシーンの数々と校長と龍司とボディガード達と今回の件の張本人の弘毅が大きいソファーに座っていた。
「オヤジ！なんでこんな所に・・・」
「まぁ座れ弘毅」
「あ・・・ああ」
「ここに来た原因は校長が話してくれる。」
「そうでした。弘毅君、君は最近自分に不思議なことが起こりませんでしたか？」
「いえなかったと・・・・・あっ！」
「なにかあったんですね？」
校長は広い部屋に透き通るような落ち着いた声で弘毅に聞いた。

「え～と。」
（俺のことは黙ってろ！！！）
弘毅の中のもう1人の弘毅が心の中で叫んだ。
（なんで？）
（いいか？俺のことが知れたらお前は間違いなく変人扱いだぜ？それでもいいのか？）
（やだ。）
（じゃ、黙ってろ。）
「いや。なかったと思います。」と、弘毅。
「いやあったはずですよ。国立精神管理高等学校特別課Ａ組から報告がありました。率直に言わせてもらうとあなたは多重人格者なんです。」
（あちゃ～）
（うわ～）
「ちょっと待ってください！さっきから国がどうたらとか意味わかんないんですけど！」
「ああ、すいません弘毅君。では簡潔に言わしてもらうと、あなたは今からすぐ沖縄に行ってもらいます。」
「は？」
弘毅も龍司もわけがわからないのであった。
「訳しすぎですよ！大体俺が多重人格者？何を根拠にそんなこと言ってるんですか？しかも、なんで沖縄なんですか校長！」
「とにかく今日限りであなたは記録上退学で、もう沖縄国立精神管理高等学校特別課Ａ組への編入も決まりましたので・・・・・」
「はぁ？？親父どうなってんだよ！」
「落ち着け。わしも良く分からんが国が決めたことには逆らえん。仕方ないがお前はそこに行ってもらう。このまま居れば、榛志久家にも影響が及ぶからな。」
「は？なんだよそれ！跡取りはお前だ！とか言ってたじゃん！！」
「養子をもらう。」

「は？ふざけんなよ！俺を見捨てるのか？」
「ああ。」
龍司は涼しい顔で弘毅を突き放す。
（どうしよ・・・・・・）
（まぁ、いいんじゃね？沖縄も最近はリゾート地化してるから都会と変わんないし、おまえの好きな空もさぞ綺麗だろうよ。）
「そういう問題じゃねぇ！！！あ・・・・・・・・・」
「やっぱり行く必要があるようだな・・・・」と、龍司。
「うっ・・・・これはその・・・・・・」
「では決まりということで。」と、校長。
「そ、その前になんで俺が多重人格者って分かった？」
と、弘毅はもはや相手が校長という立場を忘れ聞いた。
「さぁ、国の意向はまったく分かりませんし、国の調査方法のことなど聞いた事もありませんから・・・・」
「はぁ？意味わかんねえよ！ふざけんな！」
もはや校長に対しての敬意は消え去っていた。
「私には分かりません。とにかく沖縄に行けば何もかもわかります。」
「はぁ？だからそれが意味わかんねえって・・・・」
そのとき、いつまでも押し黙っていた龍司が口を開いた。
「いい加減真実を認めろ！！お前は頭がおかしいんだ！！」
「え・・・・・・」
弘毅は実の親の龍司にこんなことを言われるなんて思ってもいなかった。他人に言われるならまだしも、親族に言われるとなると訳がちがう。その龍司の一言は弘毅に人生初の絶望感を味わせた。
「嘘だろ？俺はおかしくない！見ろよ、親父！俺は普通だ！普通なんだよ！ふざけんな！」
叫ぶ弘毅だが、龍司の口から出る言葉は、
「お前はおかしい。私にはそう見える。」
という一言だった。その一言で弘毅はそれ以上反論する気にはなれ

なかった。

もう、ここには自分のいれる場所はないのだと・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

晴天の空。

先の見えぬ地平線。

どこまでも続く広く澄み渡った海。

そして、自家用機から降りてきた一人の少年がポツンと立っているのは自分の家の敷地より広い航空路。

弘毅は、

「沖縄まであっというまだったな。」

(ああ。飛行機は慣れないな。)

「ああ、いつ乗っても気持ち悪いぜ。」

「弘毅。」

後ろで弘毅を呼ぶのは父　龍司だった。だが弘毅は龍司の問い掛けにも答えず、１人どこまでも続く地平線に目を向けて立ったままだった。

だが、そんな弘毅の態度に構わず龍司は、

「じゃあ頑張るんだぞ」

と、言って自家用機に乗り込んだ。そして自家用機は広い空に飛び

立っていった。
飛び立ってから、弘毅は、
「親父のバカ」
と呟いた。

画面に映るのは弘毅の姿。それを見ていた少年が携帯電話で会話をしていた。
「ああ、弘毅君がここに着いたよ。迎えに行って。それと、くれぐれも奴等に見つからないようにね。弘毅君はこれとない人材なんだからね。奴等に取られたらそれこそ世界の終わりだよ。」
「はい。分かりました。それでは新設地下通路を通って行きます。」
「うん。そうして。じゃ、頼むよ。」
「はい。」
「ブッ・・・・・・・・」
そうして電話は切れた。電話をしていた少年の声色が突然低くなる。
「ククク・・・・榛志久弘毅君か。おまえはこっちの世界の住人だったらいいのにな・・・・・・ククククク・・・・・・・」

その頃、弘毅はまだあの航空路にいた。
「暑ちぃぃ〜〜!!俺はどうしたらいいんだよ!ああムカつく!」
炎天下の航空路はアスファルトからの地熱でかなり暑くなっていた。
そして弘毅はふと地面から顔を上げると向こうからバイク（サイドカー付き）に乗った1人の女が弘毅のもとに向かってきた。そして、目の前で止まったかと思うと、突然、
「早く乗れ!!奴等が来る!!」
バイクのヘルメットで顔は分からないが声は透き通るような綺麗な

声だった。だが弘毅はなんのことか分からず、
「は？意味わかんねぇよ！奴等って何？つーかお前誰だよ！？」
と、聞き返す。
そのとき、弘毅の頭の上から1人の少年、いや、子供とも見てとれる男の子が体中に氷をまとった姿でバイクに乗っている女に向けて手をかざし、氷の塊を投げ飛ばした。そして子供は航空路に着地する。
「チッ！」
その女はその塊を危うく避けると、
「榛志久　弘毅！早く乗れ！」
と、弘毅に叫ぶ。少年はまだ幼い顔だちに似合わない殺気に満ちた目をギラギラと光らせ、弘毅を睨み付けていた。
弘毅がそんな少年の殺気に押されているところに、もう1人の弘毅が、
（こいつはやべえな・・・とりあえずあの女の所まで走れ！）
「わ、わかった！」
と叫んでいた。そして弘毅は言う通りにその女のバイクに向かって走る。だが、バイクまであと1メートルというところで目の前に氷の雨が降り注いだ。
「うわっ！」
避けはしたものの、バイクに伸ばした手に、さっきの塊で切れたのだろうか、血が出ていた。その血を見た瞬間、弘毅は学校での喧嘩のときのように深い海に落ちたような感覚に襲われた。
そう
この世界に
自分しかいないような
孤独の底のような世界に弘毅は落ちた
（クッ・・・・・）
「クッ・・・・」
気がつくと、前に広がる映像に弘毅自身が映っていた。変わったこ

とは、現実世界の弘毅からは何かどす黒い物が溢れ出ていた。それは、禍々しいというか、おぞましかった。しかも、弘毅の体にまとわりついているのは黒い服、いや、まるで真っ黒に染まった龍そのものだった。
「ん？なんか体が軽ぃな。でもこれは趣味悪いんじゃねえか？」
弘毅はこれ以上自分の姿を見ていられなかった。それはもう見れる域を超し、怖い存在だったからだ。
そんな様子を見ていた女が呟いた。
「遅かったか！」
そして、弘毅や女を襲った少年は突然殺気を消し、まるで神にもすがるような目でいきなり弘毅を拝みだす。
「弘毅様。あなた様は我々の柱となりこの世を引っ張って行くでしょう」
行き成りの態度の変化にもう1人の弘毅は驚く。だがすぐに驚きが怒りに変わってくる。
「はぁ？何が我々だぁ？ふざけんなよ。俺はもともと誰かに束縛されて生きるようなタチじゃねえんだよ。第一お前らなんなんだ？いきなり来てバイクに乗れやら、行き成り戦闘始まったり、挙句の果てに俺にてめえらの柱になれだぁ？寝ぼけたことほざいてんじゃねえ！！なぁ弘毅！？」
（・・・あ、ああ・・・俺にも良く分からん。それよりその体・・・・・）
「ああ、こいつか。俺からしたら居心地がよくなったんだが・・・・・どうも相棒が聞きたがってるんで聞かせてもらおうか。この体の正体は一体なんなんだ？」
弘毅は少年に問いかける。
しかし少年は口ごもったままだった。
「おい。何とか言えよ。殺すぞ」
『殺す』の一言で少年の肩がさっきより小さくなって見える。
（お、おい・・・・なんか怖いぜ？お前・・・・・・）

（うるせぇ。黙ってろ。）
「で、俺の質問に答えてもらおうか」
「いや・・・・それは・・・」
「ドン！！！！！！」
少年の隣に穴が開いた。
それは何故かは分からない。
だが、もう１人の弘毅の心が一瞬真っ赤になったのは分かった。まるで全てを焼き尽くして何もかもがなくなるような。
だがもう１人の弘毅はそんな出来事もお構いなしにイラついた様子で少年に問いかける。
「お前いい加減ウゼェぞ。もういい。大体はこの体や力は分かった。興ざめだ。キエロ」
弘毅は自分の心に禍々しい感情が渦巻くのが分かった。そしてもう１人の弘毅が何をしようとしているのかも。
（おい！やめろ！落ち着け！）
（うるせぇな。いいだろうが。こんな意味不明な奴。殺してポイ、だ。）
（ちっ！）
もう１人の弘毅が腕を少年に向ける。するとその腕から黒い空気が流れ出し、ついには手のひらに集って、黒いボールのような物に成りつつあった。
そして黒いボールのような物は段々小さくなっていった。そして、
（やめろぉぉぉぉぉぉぉ！！！！！！！）
もう１人の弘毅の手のひらから離れて野球のボールのように少年にまっすぐ飛んでいく。
そして弾けた。
「ドォォォォォォォォォォォォォォォォォン！！！！！！」
こんどはさっきの穴の比ではない。直径１０ｍくらいの穴、いや、クレーターがあいていた。
少年の姿はない。

「どういうつもりだ？」
弘毅が問いかける。バイクに跨り、少年を抱えたまま佇んでいる女に。
問いかけられた女は弘毅に言い返す。
「弘毅はんでっか？ウチは花形サユカいう者ですぅ。あんさん大崎高校の人でっしゃろ？あんさんはこっち側の人間なんですから。そないに人パンパン殺したらあきまへんで。おぉ！まぁそないに怖い顔せんと。」
いつの間にかもう1人の弘毅は感情をむき出しにしていたらしい。顔が般若のような顔になっている。
「で、お前は誰なんだ？」
顔はそのままで弘毅は問いかける。
「ウチは・・・・・正義の味方・・・・とでも名乗ってお」
「バン！」
サユカの隣に穴が開く。
「真面目に答えろ。」
「はいはい、分かりましたがな。沖縄国立精神管理高等学校の者ですがな。これで分かりましたか？特別なあんさんの為の新しい学校ってモンですな。なんでこんな所まで来たかは・・・・・今までの出来事で十分に分かりましたな？
奥底の弘毅はん？」
（おい。これって俺の事か？）
（さぁな。だがこんな詰まらん茶番は終わりだ。もういいだろ。）
（おい！まさか！また）
（はぁ？何言ってんだよ。お前さっきの見てなかったのかよ。あの女俺のあの攻撃を交わすだけじゃなく何かを使って相殺しやがったんだぞ？んな正体不明な奴殺しても何の楽しみも湧かねぇっての。もう疲れた。交代だ。）
（そ、そうなのか？すげぇなあの人・・・・・じゃなくて）
「おい！」

弘毅は気が付くと現実に戻ってきていた。
目の前には確かにさっきまで見えていた光景が散らばっている。割れたアスファルト。大きい穴。そして沖縄ならではの暑い日差しの感じまで戻ってきていた。そして少年を抱えて佇んでいるサユカも。
「まぁ大体そっちは話ついたみたいやし。ほな行きましょか。」
やれやれ、という感じでサユカが喋りだす。
「は？どこへですか？」
今までの自分とは違い、今の自分と目の前の女とは初対面なのだから、一応敬語を使わないといけないかと思い敬語を使っておく。
「何言ってまんねん。我らが城・・・・オッホン・・・沖縄国立精神管理高等学校ですがな。」
「はぁ・・・・・」
「まぁそないに心配せんでもええです。取って喰ったりしませんがな。」
「え～と、そういうことではなくて・・・・」
弘毅は今気がついた事を率直に述べる。
「その男の子、どうするんですか？」
その問い掛けにサユカは面食らった顔をする。
「どうするも何も。執行部と拷問クラブにでも預けますがな。」
「ご、拷問クラブ！？」
一体どういうクラブなのだろうか。弘毅の頭の中では良く分からない妄想が渦巻く。
「どんな事するんですか？」
弘毅はサユカに恐る恐る聞く。それに対しサユカは、
「だから常識的に考えて捕虜は拷問、尋問してこちら側に有益な情報を吐かせる為の道具ですがな。」
と、サラリと言ってのけた。
そのサユカの非人間的な言動に今度は弘毅自身の心が怒りに包まれる。
（ほぅ・・・）

「あんたは何考えているんだ！こんな小さい子供を拷問！？ふざけるのもいい加減にしろよ！この悪魔！死ね！」
何故こんな事しか言えないのであろうか。自分自身まったく幼稚だな、と思う。
だがサユカはそんな弘毅の怒りにも動じずこれまたサラリと言いのける。
「あんさん何か勘違いしてまへんか？コイツは最初あんさんを殺そうとしましたんやで？」
「だ、だからってそんな小さい子供を手に掛けるなんて酷すぎです！」
「じゃあ聞きますえ？やられたらやり返す。これあきまへんか？」
「いやそれは普通にいけないと・・・・」
「甘い！甘すぎやで！ちゃんとケジメつけやな気が納まらん奴が世の中にぎょう～さんおりまんねんで？あんさんの小さい世界観で私らを比べんといてください。第一コイツはあっち側の・・・・・・・」
そこでサユカの口の動きが止まる。
「どうしたんですか？あっち側って・・・」
「なんでもありまへん。ほな行きましょか。」
サユカが跨っていたバイクから降りて弘毅に近ずく。
「え？っておい！まだ話は終わってないぞ！おい！放せ！おい！お・・・・・・・」
サユカはその手に持っていた注射器を弘毅の首に刺す。弘毅の様子からすれば多分睡眠薬だろう。
「すぅぅぅ・・・・・・すぅぅぅ・・・・」
そして弘毅が完全に眠ったのを確認するとサユカは一人呟く。
「これしかありまへんねん。裏のあんさんの力が生まれた時点でまた大きな戦いが起こる。それを失くす為にも表のあんさんの力が必要なんです。そしてこれからの色々な出来事も・・・・・・」
そう呟きサユカはサイドカーに弘毅と少年を乗せ滑走路を走り出し

た。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6932b/

善と悪が重なるまで

2010年10月10日07時22分発行